

子どもたちへ思いをこめて

歴代会長のことば

寄稿



歴代会長



初代
4代会長（故）仲地吉雄



2代会長 稲福盛輝



3代会長 佐久本政彦



5代会長 知念正雄



現会長 小渡有明

歴代会長のことば

日本の子どもたちの将来

初代・4代会長(故) 仲 地 吉 雄

私は、かねがね健康とはその人のもつ肉体的、機能的、精神的、知的、情動的Activity(活力)等の総合的な調和であると考えている。これらは相互に関連しInteractionをもつもので、そのいづれかが破綻しても他へ波及するであろうし、子どもを全体的、総合的に観ていくことが肝要であろう。そして内に多くの可能性を秘めている子ども達の夫々の特性を存分に引き出し、伸ばしていくことが周辺をとりまく成人社会の肝要でまた唯一のつとめのように思われる。

心身共に健全な子どもを大人の社会に送りこむことが、小児保健にたずさわるメディカル、パラメディカル等の責務であるとしても、送り込んだ筈の大人の社会が今日のように色々と物議をかもし歪んだ価値観の世界では折角丹精こめて育成した筈の子ども達の将来がどうも心もとなくて不安がないでもない。

近頃よく学校生活での“おちこぼれ”という

言葉を耳にする。おちこぼれといっても一体何に落ちこぼれたのであろうか。吾々が作っている人為的な社会の約束事や枠組みからはずれたり、追いついてゆけない子どもを“おちこぼれ”というのであろうか。

感受性の強い子どものことである。欠陥の多い不十分な吾々の社会機構の中でその人にマッチするよいReceptorを吾々が不幸に見出してやれなかった誤ちはなかったであろうか。謙虚に反省してみたいものである。

1980年代は逼迫した国際状況が予想されるし国内への影響も亦色々と困難さが加わってこよう。こういう時代にこそ私達大人の社会はそのBarrierとして、子ども達をより素直で協調的な、人間として何が価値あるものであるかを見きわめることのできる愛される人間像の形成に英知を傾けて欲しいものと、切に期待している。

—沖繩の小児保健(7), 1980. — (遺稿)

創立20年間をふりかえる

2代会長 稲 福 盛 輝

江戸時代の世の中は快適であったが将来に向っての夢がなかったといわれていた。そのためか人口は減少し3千万人の低迷をつづけたままで

ほとんど動きをみせなかった。この現象は「おかげまいり」に表現されている。即ち大勢の子ども達が草履をはいて大声で叫びながら周期的

に伊勢神宮への集団的巡礼運動行動にみられる。その背景には、経済成長の陰で社会緊張が一時緩んだ状態であり、将来の社会不安が予感されたといわれている。このことは、子どもの抑圧、恐怖が無意識に体の動きから出たものと推測されている。またこの時代の乳幼児死亡率は実に高く、全死亡の約70%以上も占めており、一方墮胎、間引、捨て子等も半ば公然と行われていたといわれている。そのため幕府は人口減少防止等としてこれらの禁止令を出した程だ。

明治になると徳川300年近くの鎖国を解いて外国文化吸収時代に入った。そのため国力は大いに発展を迎えた。しかし一方第1次大戦以後は軍国主義が台頭し、富国強兵というスローガンを打ち出し、国民の健康、疾病が国力を左右する重大な要因であることを認識させ、衛生に力を入れ、生産を高める政策として産めよ殖やせよの人口増加が全国的に展開された。そのため人口は増加の一途をたどって来た。しかし昭和になって日中事変、次で第2次大戦に突入したが敗戦となり、国土は焦土化し一時国民の生活は窮乏に陥ちいった。

その後次第に復興するにつれて人口も激増し江戸時代より100年足らずして3倍以上に達した。

江戸時代から昭和末期までの時代変遷をみると、歴史は繰り返すといわれているが、この現象は洋の東西を問わず真実と思われる。これを母子保健の見地からみた場合、現在経済的に良くなり、物質が豊富になるにつれて大人達の価値観が変わってきたように思う。その現象が第1にみられるのは、少産少死時代に入った。先づ少産は、女性の結婚年齢が遅くなり出産適齢である20歳前半の約80%が未婚で赤ちゃんを産むべき女性が少なくなって来たことでも明白である。その背景に女性の高学歴、親の共働きによる専業主婦の減少、住宅の狭小、子どもへの多額の教育費、母性意識の稀薄化現象等があげ

られている。一方少死の要因については、食生活の向上、医学技術の発展、医薬品の向上、公衆衛生の進歩は、直接、間接に乳幼児の死亡を激減させ、特に乳児死亡率においては、日本は現在世界第1位の少死国となった。

第2に家庭の変貌による育児不安現象が多くみられてきた。即ち自信を持って子どもを育てる母親が少なくなってきたことである。

母親の中には、子どもがわずらわしくてイライラする、かわいいとは思わない、育児が嫌い等の所謂育児ノイローゼの母親が増加したのである。その結果、子捨て、子殺しの母親が増加してきた。その要因は多くあるが、核家族化による育児不安、育児情報の氾濫に対して対応が出来ない親達が多くなった。

第3に子どもの疾病の変遷と反社会的子どもの増加である。半世紀前までは子どもの疾病はほとんどが伝染病で多くの生命が奪われたが現在は激減した。これに代って肥満児、小児成人病、事故、心身症、自殺等の増加が目立ってきた。一方非行児、いじめ、暴走族、親殺し等の反社会的な行動に出る子どもも多くみられるようになった。しかしこの様な風潮は日本だけではなく先進国の多くの国々にもみられる現象である。これに反し発展途上国では、飢餓、病気、戦争等によって多くの子ども達が生命を失いつつあるのが現状である。この様な社会をみると、夢のある時代とはいえない、特に未来性ある子ども達にとってはふしあわせな時代ともいえよう。しかしこの様な時代はいつまでも続かないと思う。今全世界中の人々がこの現状を反省し、未来への希望ある社会を目指して努力しているのも事実である。

振り返って本協会のこの20年間の歩みをみた場合、協会の設立の主旨である「子ども達に何が出来るか」について私達は目標をかかげて歴代の役員、会員一体となって着実にその地域の母子保健に根をおろし微力ながら貢献してき

たことに誇りを持っている。しかし今や時代と共に変貌する子ども達に対応出来るような対策を樹立する時期に直面している。例えば育児は楽しいもの、お母さん方の不安にこたえられる保育所の地域性を大切に育児相談をすすめる。これと同時に現在の育児教育の企業化に対する反省、子どもの遊びが文化を損う大人の経済優先等に対応して行うべきである。しかしながらこれらの問題を当協会ですべて解決するには限界

があり到底出来ない、従って、他の協会や組織団体、行政等と相提携して包括的な子どもの問題を考えるべきである。

そうして青少年時代に生涯の健康の基礎づくりをしてやることと国内だけでなく世界の子ども達にも目を向けて行くことが、21世紀に小児保健協会に課せられた使命であると思っている。

満20周年を迎えて

3代会長 佐久本 政彦

戦後、我が国の平均寿命が急速に伸びて、今や世界の長寿大国となりました。この平均寿命の伸びは、我が国の経済生活状態の向上と、公衆衛生の普及、医療の進歩によることが大きな原因でありましょうが、それに近年における乳幼児の死亡率の低下、罹患率の減少、体位向上など小児保健の努力が大きく関与していることと思います。

小児保健は時代と共に進展し、対象年齢も胎児期から青年期に至るまで延長し、以前は保健指導の重点は栄養問題におかれ、体位向上を目指しておりましたが、今や栄養問題はほぼ解決し、むしろ過剰とさえ思えるようになり、その反省から体位よりむしろ体力、即ちいかなる環

境にも生き抜く強い子どもに育てることが、精神衛生や教育のしつけの問題と共に小児保健の第一義となろうとしています。

小児保健は子どもの健全なる身体と、健全なる精神を育成し、健全なる社会人を目指す聖なる仕事であります。

沖縄県小児保健協会は発足して今年で満20周年を迎えました。微力ながら、私達が沖縄の子ども達の保健向上に寄与したことを喜ぶと共に、今後ますます充実向上を期し、会員諸氏のそれぞれの分野で、それぞれの職域で同じ理念に向けて研究実践されんことを念願する次第であります。

平成5年7月

沖縄県小児保健協会 20年の歩みの中で ——私的なこと——

5代会長 知念正雄

小児保健協会が、平成5年7月で20周年を迎えました。この20年の歩みの中で、私にとって思い出に残る3つの事について書きます。

1) 稲福盛輝先生との出会い

昭和48年に本協会の設立総会が開催されたのですが、その準備のために発起人会が何回かもたれました。最初に集まったのが、稲福先生と山本先生と私でした。その時に初めて小児保健協会のことを知ったのでした。今から思えば、本当に不思議なことです。当時の小児科医会の山本達人先生のご紹介で、県立中部病院にいた私に声がかかり、稲福先生にお目にかかり、3名で会食しながら話し合ったのが、私達の最初の出会いはなかったかと思っています。当時の私は、病院の中での仕事が多忙を極めていた反動として、予防医学的活動をしたいとしきりに思っていました。それで稲福先生のご提案にすぐに賛同し、喜んで仲間に入れてもらえたと思います。大学の医局では小児循環器の勉強をしてきた私が、小児保健活動をするきっかけとなったのは、創立当時に稲福先生と出会ったことなのです。20年経過した今日でも、先生とご一緒に協会の中で仕事が出来ることは、とても幸せなことだと思っています。

2) 会長になって全国学会を開催したこと。

私は、昭和56年1月に社団法人になると同時に5代目の会長に就任しました。それは前年(昭和55年)9月に会長の仲地吉雄先生が急逝され、しかも全国学会(第29回日本小児保健学会)の開催を沖縄で引き受けた直後でした。私が会長に推されたいきさつは、水面下でいろいろあったようですが、本人の私はよく知りませ

ん。生前の仲地先生に、ある日電話で呼び出され、レストラン・ブルースカイヒル(北中城村の丘の上)にて、2人きりで会食をしました。仲地先生は非常に厳しい方という印象があっただけに、少なからず緊張して会食したことを記憶していますが、どんな話し合いをしたかは、もう覚えていません。その後間もなくして、先生の代りに会長を引き受け、学会開催を引き継ぐとは思もかけないことでした。

全国学会を沖縄でやることになるらしいという情報は、当時の理事会で会長の仲地先生からあり、ご自分の会頭講演やシンポジウムの構想などをお話しになったのを覚えています。仲地先生は、急に倒れる直前まで、会頭講演の草稿をお書きになっていた様にも伺いましたが、明らかではありません。いずれにしましても、評議員であった私におはちが廻り、何回か考えた末に会長を引き受けるはめになったのです。このことは、私のこれまでの人生の中で、最も大きな出来事でした。各理事の先生方が熱心に「やろう、やろう」ともりたてて、私自身に「なんとかなるのでは?」と思わせ「やってみるか」という気になったのだと思います。根は本当にお人好しの単細胞なのです。それからの後の学会開催までは、もう無我夢中でした。理事全員あの情熱は、今思い出しても「第2の青春」の毎日でした。理事会は夜の12時まで話し合い、学会前日は、文字通り深夜の立ち廻りでした。

昭和57年9月30日、10月1日に沖縄で開催された第29回日本小児保健学会は、参加人員1,663名、一般演題274題で大成功

でした。この学会は従来の小児保健学会の流れを大きく変えたと思います。第1に演題数が増えたこと、第2に内容的に、乳幼児保健から学童保健まで幅が広がったこと、第3に大学の小児科学教室以外の団体が学会を主催することになったことです。

ともあれ、学会が成功したのは理事全員と学会役員の皆さんが、燃えるような情熱でその準備に取り組んだお陰だと思います。その当時のことを思い出すたびに胸が熱くなります。

3) 子どもフォーラム開催のこと。

私は昭和62年4月に会長を辞任し、現会長の小渡有明先生にバトンタッチしました。これで私はほっとしましたし、しばらく休みたいと思いました。というのは、全国学会の準備期間中に“慢性肝炎”の微候(肝機能障害)があって、ひそかにチェックしてもらっていました。ところが、ぼんやりしようと思っていました私自身に“人生の生きがい”という問題が心の中で起こりました。このことは、あまりにも若いうちに全国学会の会頭などという無謀なことをしでかした後のプツンだったのかも知れません。しばらくして、ある日ふっと思ったのです。何か「心ときめかすもの」がほしいと。落合靖男先生とお会いしたときに、飲めない酒のみながら、私は「人間はいくつになっても、何か心ときめくものを持ちながら仕事をしたい」と冗談のように話し合ったのはその頃でした。そんな時に、小渡会長から企画委員の仕事ま

かされ、“明日を拓く子ども”をテーマにフォーラムを開催することが計画されました。平成元年10月に第1回フォーラムが実施され、3回シリーズで開かれました。再び皆と一緒に忙しい思いをしながら活動しました。このフォーラムの開催は、私にとって“心の再生”の転機になりました。少しずつ落ち込んでいく自分に“この道しかないんだ”と思わせるようになって、やっと心が落ち着きました。小児科医として子どもの健康に関する全てのことに関心を持っていこうと思いました。そしてもっと社会的行動をすべきではないかと思ったのです。理論より実践へ一歩ずつ、出来る範囲でやっといこうと、小さな、小さな決心をしたのです。この様な私の心の経緯—これはあまりにも個人的なことですが—から、子どもフォーラムは重要な出来事でした。

以上、この20年間の小児保健協会との関わりから、私自身の内面的反省を含めて3つの出来事を書きました。私としては、個人的にどれ程の仕事ができたかについては、非常に否定的です。やはり親しい仲間と一緒に仕事がやれるということ、そのことが最も大切なことだと思っています。これからは、次の世代のひとびとが喜んで引き継いでくれる様に活動(仕事)をしたいものです。

小児保健協会が今後とも活発に活動を続け、ますます発展しつづけることを祈っています。



沖縄県小児保健協会創立20周年に寄せて

東京大学医学部母子保健学教室
日暮 眞

沖縄県小児保健協会が誕生し、早や20年を迎えられたことを知り、心からの祝意を表したく存じます。

思えば、私と先島の子ども達とのかかわりも、将に沖縄県小児保健協会の歩みと併行して歩んできたように思えます。と申しますのは、厚生省・沖縄県・沖縄県小児保健協会による先島における母子一斉健診が開始されたのが昭和49年7月からであり、その後現在に至るまで毎年継続して実施され、私はこの行事に1年として欠けることなく参加させてもらって居るからです。

沖縄県小児保健協会が深くコミットしているこの健診事業を当初より体験しているもの一人として、恵まれない先島の若い県民達のために、沖縄県小児保健協会が並々ならぬ努力を払われていたかを今更らのように回想しております。この健診事業が開始された当初、創立間もない沖縄県小児保健協会は、その財政基盤も弱く、貧しい状況の中で（失礼な憶測であるかも知れませんが…）、健診事業が円滑に実施されるために、また参加している健診団員一人一人のために、目立たないところで細い配慮と援助をして下さいました。そして、その支援活動は

今なお継続されております。

さらに、沖縄県小児保健協会は、私が知る限り、機関誌刊行、各種研修事業等を活発に行なっている。毎年手にする機関誌の内容の充実ぶりは目を見張るものがありますし、その装丁も仲々立派なものです。かつて私が山梨県で小児保健協会活動をした経験から、毎年このような立派な機関誌を発刊しつづけること、各種研修会を開催しつづけること、先島の健診事業を共催しつづけていること等々、どれ一つとっても大変な仕事振りと評価せざるを得ません。そのような点から、沖縄県小児保健協会に対し、私は、大いなる敬意を表すると共に、さらなる発展を期待致しております。

つぎなる10年は、沖縄県自体が一層の発展を遂げることと思います。その発展の歳月と共に、沖縄の子ども達の育つ環境も今まで以上に変化してゆくことが予想されます。変わりゆく「子どもをめぐる環境」に豊かな心を失うことなく上手に対応してゆける子ども達を育てるガイドラインの提示が、これからの沖縄県小児保健協会には期待されることでしょう。

最後に、重ねて沖縄県小児保健協会の発展を祈念してお祝いの言葉と致します。



沖縄県小児保健協会への期待

沖縄県環境保健部
砂川 恵 徹

社団法人沖縄県小児保健協会が20周年を迎えるにあたり、お祝いの言葉を申し上げますと同時に、本県の小児保健の向上に多大な貢献をなされたことに対し、心から敬意と感謝の意を表します。

ご承知のとおり、本県は昨年本土復帰20周年を迎え、医療事情もかなり改善されてきましたが、離島・僻地におきましては小児科医等の専門職は充分とはいえない状況にあります。沖縄県小児保健協会は、このような保健医療行政を埋め合わせる形で、市町村や保健所と連携をとりながら、20年にわたり県下の全市町村において乳幼児の健康診査を実施し、疾病の早期発見・早期治療へと多くの成果をあげてくれました。同時に健診体制の確立を図るとともに、各種の研修会や学術学会等を開催して医師をはじめ多くの専門職種の方々に貢献していただきました。また地域住民に対しては育児講演会や子どもフォーラム等を開催して地域住民の意識の高揚を図り、すべての市町村において健康診査も充実してきました。

このようなご功績により昨年は名誉ある保健文化賞を受賞されましたことは、本県にとってもたいへん誇りに思っています。

我が国の母子保健行政は、昭和22年に制定された児童福祉法及び昭和40年に制定された母子保健法に基づき、保健衛生の向上、母子医療制度の充実、母子保健の基盤整備の強化など一貫した施策のもとに事業の推進が図られてまいりました。

県におきましても、健康診査事業及び保健指

導事業を重点施策として取り組んでまいりました。

現在の母子保健対策は、出生前には妊婦健康診査、妊娠中毒症療養援護、B型肝炎母子感染防止事業を行い、安全な分娩と未熟児出生の防止、児へのB型肝炎の感染防止を図っております。出生後には、新生児に対して先天性代謝異常検査を行い、心身障害の発生防止を図っています。昭和52年～平成3年までに39人発見され早期治療がなされています。また、6～7か月児には神経芽細胞腫の検査が行われ、小児がんの早期発見早期治療を図っています。昭和59年～平成3年までに9人が発見され、手術を終えて元気に育っています。その他、3～5か月に1回、9～11か月に1回行われる乳児健康診査につきましては貴協会が、1歳6か月児健康診査は市町村が、3歳児健康診査は保健所が行い、乳幼児の身体発育、精神発達の面から総合的な健康診査を実施して、乳幼児の健全育成を図っています。

また、公的医療扶助として未熟児養育医療、育成医療、小児慢性特定疾患等の医療費の給付を行い、障害の防止と医療費の負担軽減を図っています。さらに乳幼児医療費助成事業についても実施に向けて準備をしているところであります。

本県は若年の妊産婦が全国に比べて多いため、健全母性育成事業として思春期に関する相談や指導が必要で、平成元年～3年の3年間、日本家族計画協会の御協力を得て本県で思春期セミナーを開催し、67人がI～IIIコースを修了し

ましたが、保健所や市町村での取り組みはまだ充分とはいえない状況で、今後電話相談や思春期教室等の事業の強化が必要であります。

本県の主な母子保健の指標を見ますと、出生率は全国第1位（平成3年14.4、全国9.9）となっていますが、低体重児の出生率（8.8、全国6.6）や乳児死亡率（5.2、全国4.4）は常に高率を示しています。乳児死亡率は復帰時の11.5から平成3年には5.2と減少しましたが、全国に比べるとまだ高い状況にあります。平成3年の乳児死亡数91人のうち66人は新生児死亡で72.5%を占めています。また周産期死亡率は平成2年は全国第1位でしたが、平成3年は改善されて全国平均（5.3、本県5.4）に近く、妊産婦死亡率は全国一低く、平成2・3年は死亡数0となっています。若年妊婦による出産率は2.9で全国1.5に比べ高率であります。

平成3年の出産数は17,088人で復帰時の20,871人に比べると3千人余の減少であります。出生数が全国一高い本県においても年々減少の傾向にあります。

1992年度の国民生活白書は、少子社会は社会を構成する年齢層にアンバランスを生み、若・中年層の社会的負担が増え、社会の経済的活力が損なわれる恐れがあると警告しています。しかし、最も懸念されることは、子ども達の健全な発育・発達面への影響であります。次代を担う子どもが心身ともに健やかに生まれ育つための環境づくりは、極めて重要な課題として、白書は(1)社会ぐるみの出産育児支援体制の整備、(2)住宅や都市公園など安心して過ごせる空間の

充実、(3)個性重視の教育の充実と教育費の負担軽減を提言しています。

子どもを取りまく環境は大きく変化しており、核家族化の進行、地域連帯意識の希薄化、情報の氾濫等、環境の変化は母親に育児等をめぐる不安をもたらしています。また、女性の就労は年々上昇し、出産後も働き続けることを希望する女性が増加してきています。

このように子育て環境が変化するなか、安心して子どもを生み育てるための環境づくりとして、子育て支援への総合的かつ積極的な取り組みがもためられています。

母親の育児不安予防や解消を図るために、保健所では電話相談等を行っていますが、充分とはいえません。今後はいつでも相談のできることも110番の設置や子育てに関する情報の交換や子育て経験者の話を聞く機会を提供する等、育児ネットワークづくりの推進が必要だと思われます。これらの推進に当たっては、地域の社会資源を最大限に活用するとともに、保健・医療・福祉の関係機関や団体と充分連携をとる必要があります。その中心的役割を小児保健協会が果たしてくれるものと期待しております。

21世紀に向けた本県の「母と子の健康づくり」に、貴協会の果たされる役割は大きいと思われれます。長寿日本一の県にふさわしい健やかな子を生み育てるために、皆様のご活躍を期待しております。

終わりにになりましたが、沖縄県小児保健協会の益々のご発展と皆様の御健勝を祈念しましてお祝いの言葉といたします。

平成5年3月



応接室と子どもの作品

沖縄県人材育成財団
津留健二

どこの職場でも応接室は、いろいろな方が出入りして賑やかである。県教育委員会の応接室は、県庁舎の13階にある。

ここでは、来客の対応は勿論のことであるが、県外からおいでになるVIPとの面談、マスコミとの記者会見、それに県代表で全国大会や九州大会等で優秀な成績をあげた子どもたちや先生方との面談等が行われ、幅広く使われている。

私は、この応接室を子どもたちの作品展示ができる場所にしたいと考え、陳列棚をしつらえ、学校の先生方の協力を得て整備してきたところである。

今では、特殊学校の生徒が描いた素晴らしい絵や焼物、高校生のミンサーによる壁飾り、先生方の焼いた陶器、それに生徒たちが心を込めて育てた観葉植物等が応接室の空間を飾っている。

これらの作品は、外来者に鑑賞していただき、話題にしてもらっているが、マスコミの取材で写真撮影をしたり、テレビカメラを回したりするときには否応なしにバックに写し出されている。そんなことから、時には保護者の方がカメラを持っておいでになり、自分の子どもの作品を収めて帰られることもある。

自分の子どもの作品が教育長の応接室に飾られていることは、当人は勿論のこと家族にとっても嬉しいことであり誇りに思うからであろう。

先日、沖縄県・ハワイ州高校生交流プログラムで本県の高中生と一緒にハワイを訪問し、生徒たちがお世話になる高校を数校観察させてもらった。その時、訪問先の高校の校長室で共通

していることがあることに気がついた。それは、どの校長室でも壁いっぱい生徒たちの写真や新聞のスクラップ、表彰状が貼られ、生徒の活動が紹介されていることである。

このことは、校長になるとどうしても生徒たちとの日常的な接触が少なくなり、物理的な距離は遠くならざるを得ない。それをなんとか心理的に縮めようとする努力が、このような形でなされているのではないかと思う。

人間、誰でも自己の存在を認められることは嬉しいことである。

新しい学習指導要領に示された基本方針の一つに「個性を生かす教育を充実すること」という文がある。個に応じた指導を充実させ一人一人の児童生徒が持っている良さを認め伸ばす教育の営みが強調されているのである。

本県の教育委員会でも児童生徒の実態に立って「基礎的・基本的な内容を重視」し、心豊かな学習環境で真の学力をつけ、知・徳・体の調和のとれた人間形成をめざしている。

このことは、子どもたちが人や自然や文化との出会いのなかで「日常生活を自ら点検できる力」、「自ら学ぶ力」を身につけることであり、一人一人が自分の持ち味を大切にし、主体的に考え、判断し、行動することができるようになることである。

昨今、中高校生の問題行動や交通事故等が後を絶たないので、ややもすると大人の目が子どもたちの暗い面にだけ奪われがちであるが、私たちは、子どもの持っている良さを見つけ、その良さを伸ばしてやる工夫を積極的に進めなけ

ればならない。

応接室をミニ展示場へという発想も、その試みの一つである。応接室のこどもたちの作品が

もっと増え、本県の児童生徒の文化活動の一端が紹介でき、訪れる人々に誇れることを願っている。



子の資質は子の責任か —浦和の息子殺害事件判決に思う—

琉球新報社編集局
三木 健

家庭内暴力を振う23歳になる長男を殺したとして、殺人罪に問われた浦和市内の元県立高校の教師とその妻の判決公判が、去る3月4日浦和地裁であった。模範的な学校教師の家庭で起きた異常な事件だけに、世間の大きな関心をよんだ。

日比幹夫裁判長は判決で「長男を惨殺した責任は極めて重大だが、第一の要因は長男の資質。家庭崩壊の危機の中で最終的に殺すに至った心境はそれなりに理解できる」として、両被告に懲役3年、執行猶予5年を言い渡した。求刑が父親に懲役7年、母親に6年であるから、判決は温情的な量刑だといえる。しかし私が腑に落ちないのは、量刑のことではない。判決理由である。

判決理由の中で同裁判長は「長男の立ち直りは極めて難しく、それまでの親の接し方にも間違いはなかったし、長男の精神的荒廃が極限の状態では、家庭が崩壊させられるか、長男を殺害するしかの選択しかなかった」と述べている。

私が理解に苦しむ第一のことは、親が子を殺すという異常な事件の第一の要因を「長男の資質」にある、としている点である。さらに第二の点は、長男の精神荒廃が極限状態では「家庭が崩壊させられるか、長男を殺害するしかの選択しかなかった」としている点である。果たし

てそうだろうか。

その前にこの事件のあらましを記しておこう。殺害された長男は小、中学校のとき勉強はよくでき、クラスでトップクラスの成績だった。中学では軟式のテニス部に入り、2年生の秋にはキャプテンまでしている。中学を卒業するときの成績は全校で1、2番。本人の希望で進学名門の浦和高校に進学する。

ところが高校に入学して間もなく「クラスでだれもしゃべれる相手がない。皆がおれを避けているような感じがした。学校では浮いている」など言うようになり、成績も中かそれ以下になる。2年生になると勉強よりポピュラーミュージックに関心を示しはじめ、先輩らと一緒に作詞、作曲をしたりしている。そのうち学校にも行かず音楽をきいたり、親から「学校に行くように」とくり返し注意を受けるようになる。

結局期末テストも受けず退学届を出すことになる。こうして2年生で中退したが3か月ほどして大学に入りたいと言い出し、数日間も徹夜で勉強して大検に見事合格している。

それからある一流私大に合格し、スキーサークルに入って一級資格をとったりして、すべてが順調にいくかに見えた。ところが大学2年からアルバイトやスキーやデートに明け暮れ、3年生のとき中退する。本人はミュージシャンに

なりたいたと言っていたという。親はミュージシャンでは生活の保証はないから司法試験を勧め、本人も数か月は勉強したが続かずこんどは酒におぼれるようになった。

そして自分が女性とうまくいかないのは「親のせいだ」と母親に悪態をつくようになる。台所の冷蔵庫をひっくり返すなど家庭内暴力がエスカレート。耐えかねた両親が昨年6月4日、自室でねていた息子の胸などを包丁で刺し、「殺さないでくれ」と叫ぶわが子を母親が頭をモデルガンで殴り失血死させた。これが事件のあらましである。

家庭内暴力の苦しさは、実際にそれを体験したものでなければわからない、といわれるのを承知の上であえて言わせてもらえば、それでも親はその苦しみに耐えるべきであった。状況は確かに厳しかったとしても、判決がいうように家庭崩壊か長男殺害かという2者択一の問題では決してなかった。

もしもその理屈がまかり通るなら、家庭内暴力で家庭崩壊の危機に直面した場合、殺人も許されるということになり、これほど恐ろしいこともない。人間の生命より世間体や面子を重ん

じる日本的社会の体質がこの判決にはにじみ出ている。

さらに殺害責任の第一の要因を「長男の資質」にありと決めつけているに至っては言語道断である。殺害された長男は、むしろ必死になって生き続けようとしたとしか思えない。学校中退をくり返しながらかも、彼はミュージシャンやスキーなど自分の道を見出そうとしたのである。むしろすばらしい資質をもちながら、それを伸ばすことができなかったことに問題がある。

しかし、優秀な学校教師である両親は、学校を絶対視し、子に対しては父親である前に絶えず教師であり続けようとした。息子は家庭に学校にはないものを求めようとしたのに、父親は家庭に学校を持ち込んだのだ。

もし判決のいうように「長男の資質」が第一の要因だとしても、それは親が負うべき責任である。なぜなら子の資質は決して親と無関係には形成されないからだ。

私もこの父親と同じ年頃の子を持つ親の一人として、この事件は決して他人事ではない。ただ、私は少なくとも子どもの人格を認め、学校を絶対視することだけはさげたいと思う。



こども千遍万様

沖縄タイムス
由井晶子

バスの中で、3つになるかならないかの坊やがいきいきカン高い声でむずかっていた。若いお母さんがびしゃびしゃとお尻や肩をたたいて黙らせようとするがきかない。と、運転手がマイクを取って「やかましいよ、もう。お客さんに迷惑になるから静かにしなさい」とおどした。

低い怖い声だった。

お母さんはいよいよ焦って「ほら、おじさんにも怒られるさあ」となお怒る。坊やはそれでもしばらくぐずっていたが、次の停留所で高校生のおねえさんたちがどやどやと乗りこんできたのに気がまぎれて静かになった。

コンベンションホールでオペラ「椿姫」をやっていた。前の席にいる7～8歳の男の子が、3時間ものイタリア語上演をおとなしく見ている。「おもしろい？」ときくと、「うん、着ているものがきれい。歌とダンスがおもしろい」と目を輝かして答えた。那覇市民会館のモダンバレエ公演は沖縄戦をテーマに、少し重いけれども美しい舞台だった。3～4歳の女の子や男の子があちこちにいる。時には退屈してぐずぐずいう様子だが、観客のじゃまにならない程度に静かに見ている。こんな光景は珍しくない。

沖縄も変わったものだと思う。

むずかる坊やおどしつけたバスの運転手は、日頃「最近の若い母親は甘すぎる。こどもが人の迷惑になることをしても叱らない」という年配の女性のぐちを耳にしているに違いない。10年も前なら、あれくらいのヤンチャ坊主にイライラする大人は少なかった。でもお母さんは沖縄の伝統的母親だったな。

劇場に小さなこどもを連れてくるなんて非常識、まだまだ沖縄の観客のマナーはなっていない…やはり10年ほど前にはそんな嘆きをよく聞いた。新聞にも投書が寄せられた。こどもたちは大声を張り上げたり、通路を走ったり、まったくうるさくて邪魔だった。今や、わんぱく盛りの男の子がうっとりとおペラとはと驚いてしまう。

北京へ行った時も少し驚いた。万里の長城、紫禁城、有名な庭園、どこも家族連れで一杯。お上りさんも多い。お弁当を広げ、写真をパチパチ撮って実に楽しそう。人々が少しずつ豊かになっていくさまはひとつとながら嬉しいが、両親、あるいは4人から6人の大人の中に幼児が1人ということが多い。

1人っ子政策のけっか、父方、母方のおじいちゃん、おばあちゃんがそろって、こどもは聞きしにまさる“小皇帝”ぶりを発揮している。私たちがカメラを向けると、どの子もかわいら

しくポーズをしてくれる。大人の服装とこどもの服装にはかなりの差がある。

マニラでは、タクシーが走り出す前、あるいは、ホテルのロビーで、デパートの入口で、日本の観光客と見れば7～8歳の子たちがワッと群がり、小銭をせびって手を突き出す。女の子が多い。

うとうしい気分や悲しい気持ちより懐しい気持ちが先に立つから不思議だ。遠い昔の私たち自身の社会を思い出し、タフな少女たちに親近感を持ってしまうのである。

モスクワはレーニン丘で、少数民族の、東洋系の顔だちをした幼児が、つぶらなひとみでじっと私を見上げていた。その直前に訪ねた近くのロシア正教の寺院で求めたマリア像のペンダントがポケットにあったので何気なくモミジのような手ににぎらせた。

はにかみながら受け取ったこどもが母親に見せに行くと、母親が飛んできた。「スパシーボ(有難う)、バリショエ(大変)スパシーボ」、心から繰り返す感謝の言葉に、こちらの方が恐縮して身を縮めた。まだ社会主義国ソ連邦が生きていて、多くの寺院は閉ざされるか、観光客用に開かれている頃だった。母親は敬けんなキリスト信者らしく、貧しい身なりながら、こどもにもつつまじやかな気品が伝えられていた。

外国でも国内でも、旅をすると、わずかな触れ合いながらこどもたちは大人以上にその社会を物語るように思う。なまかじりの先入観で「こういう国」「こんな地方」ときめつけがちな私たちに、どんな社会も一通りでないさまざまな側面があることを教えてくれるのもこども。そして時代の変化はいちはやくこどもたちの行動や顔つきに表れる。

今、沖縄ではかつてないほどこどもたちが明るい表情でハキハキ自己表現をする反面、中学生の暴発や小学生のいじめ、登校拒否など陰の部分の闇も深くなりつつある。復帰20周年、

自分たちの文化や国際的位置をしっかりと身すえ、自身と誇りに満ちた面、バブル景気に浮かれて自己破産を招きかねない面、管理統制が進んだ面、私たちの社会の表裏が子どもたちに直接反

映している。

小児保健協会が、20年の輝かしい実績の上
に心の領域まで含むこどもの健康増進に一層の
役割を果たして下さると信じている。



乳幼児保健の問題点

宮城小児科医院
宮城英雅

未就学児の生活の場としては、家庭・保育所・幼稚園などがある。集団生活をせずに家庭だけで過ごす子、保育所で1日の大半を過ごす子、午前中は幼稚園で午後は学童保育所で過ごす子など実に様々なライフスタイルが存在している。

時代的背景としては教育費の高騰、住居の問題がある。

風潮としては価値観の多様化があり、特に女性の職場進出や余暇の利用法などに変化が起こっている。主婦・母親・育児といったライフスタイルよりも1個の人間としての生活を重視する傾向があり少産現象が起こってきたのである。

巷間には結婚もせずにキャリアウーマンとしてマスコミから讃美された女性達が闊歩している。政府も婦人の人権を高める施策を次々と打ち出してこのような風潮を支援してきた。

一方急速な高齢化社会を迎えて国家は高齢者のQOLを実現するため老人問題に制度改正や財政投資を行ってきた。

その間少産傾向は着実に進行し、出生率は人口千対9.9(合計特殊出生率=1.53)となった。

慌てた政府は乳幼児医療無料化、扶養手当、育児休業法などと政策を打ち出した。

地方自治体においても保育所の定員割れを生

じ(少産+民間保育園の融通性の魅力が要因)延長保育が実施されるようになった。

沖縄県は長寿日本一(世界一)であるが、出生率も第1位、離婚率も第1位であり、従って、母子家庭も多く、それだけ保育園の需要も大きいことが推測される。

さてこのような状況下で生活している乳幼児の健康に対して行政的に如何なる支援がなされているかと問うと、

乳児健診(民間)

1歳6か月児健診(市町村)

3歳児健診(県)

保育所健診(市町村)

民間保育所健診(民間)

公立幼稚園健診(市町村教育委員会)

私立幼稚園健診(県学事課)

などが挙げられる。

従って健康管理の記録も市町村、保育所、民間保育園、私立幼稚園及び学校併設幼稚園にそれぞれ保管される。

故に個人が成長するに伴って生活の場も変わるの
であるが、これらの情報は組織の中で眠ったま
ま、個人に伴って行かない。同一の幼稚園と学
校ですらこの情報は伝わって行かないのである
から、民間保育所から市町村立保育所へ移行す

る際にはなおさら困難である。

これらの個人情報個人について廻るシステムや、母子健康手帳の十分な活用と改正が必要だと痛感する。

一方医療提供者の側から見ると、保育園医の組織ができていないので名簿の把握が困難で学校医のように組織的活動ができないのである。従って園医の質の向上や健診の質の向上も望むべくもない。

さらに小学校に進む際にも母子健康手帳は全く活用されず同手帳の使命は幼稚園で終るのである。

この母子健康手帳は女性の場合は第1回の妊娠までは活用して欲しいし、男性の場合も入社時までは活用して欲しいものである。

以上の問題点から次のことを提案する

- 1 3歳児健康診査は市町村へ移行されるべきである。(可能性あり)
- 2 保育園医の組織を作り、保育所・幼稚園児

の問題に取り組むべきである。

3 母子健康手帳は少なくとも中学校まで使用されるよう改善すべきである。例えばDT 3期や風疹ワクチンの記入欄の設置である。

沖縄県小児保健協会が発足した当時は、3歳児になって始めて身体的・精神的異常が発見されることが多かった。

1歳6か月児健診が充実してきた為に、言葉の遅れや情緒障害等の発見時期も低年齢化してきた。

それは那覇市立心身障害児療育センターを通して痛感する。

この早期発見の背景には、保健婦や母子保健推進員の質の向上があることを確信している。

障害児発見の機能は充実してきたが、障害児を支援する機能は未だ充分ではない。

市町村の今後の強力な取り組みを期待して稿をとじることにする。



沖縄県小児保健協会の理事になって

おおぎみクリニック
大宜見 義 夫

私が沖縄県小児保健協会に理事として参加させて頂いたのは昭和55年で、もう17年になります。

当時、第29回日本小児保健学会が知念正雄会長のもとで初めて沖縄で開催されることになり、うまくやらねばという気負いと緊張感から、どの理事もピリピリしていて、夜間何回も集っては論議を重ねたものです。

学会開催日を9月30日にしたのも、統計的にみて台風が一番少ない日はいつかを、気象台

に問い合わせを決め、会場も一日余分に借り、万一の台風来襲に備えたものです。

私は、「変わりゆく社会と子ども達」というテーマの学会シンポジウムに参加することになり、その資料集めに警察、鑑別所、少年院などを診療の合間に駆け回り、資料収集に奔走しました。

当時は、役員の一員として離島健診にもよく出かけました。久米島、渡嘉敷島、南北両大東島、粟国島、渡名喜島、宮古、八重山などを訪

ねて、古きよき沖縄の人情風情に接し得たことも、シンポジウムの資料作成に役立ちました。

小児保健協会の活動は多様です。全島、くまなく行われる乳児健診をベースに、年一回の総会や学会、育児講演会や母子研修会、出版物の発行（子どもの健康、からだと心の周辺、乳幼児健診マニュアルなど）、子どもフォーラム（琉球新報社と共催）、母子保健大会（県と共催）など多岐にわたります。

その活動と実績が認められ、平成4年9月には第44回保健文化賞の受賞という栄誉に輝きました。

このような多様な活動が続けられる原動力のひとつは、役員各自の熱気と意気込みではないかと思えます。

長年理事として頑張っておられる先生方をみても、小渡有明会長（県総合精神保健センター所長）、知念正雄元会長（沖縄県小児科医会会長）、稲福盛輝理事（沖縄県公衆衛生協会会長）、安次嶺馨理事（沖縄県公務員医師会会長）、仲里幸子副会長（県立沖縄看護学校校長）、石川清治理事（琉球大学教育学部教授）など、要職をいくつも兼ねる多忙な身でありながら、時間をやりくりして夜間集まり、討議を重ねてきました。

私自身、19床のベッドを抱える開業医のため、外来診療を終わっても入院患者のチェックに

手間取り、会合には遅れがちで、他の理事の先生方にはいつも迷惑をかけてきました。

会議中、患者の状態悪化を知らせるポケットベルに呼び戻されたり、管理の甘さから夜半戻ってみると病室が荒れていて、対応に四苦八苦したことも何度かありました。

同じような事情をどの理事も抱えながら、小児保健に対する意気込みだけをよりどころに息の長い手弁当方式の活動を続けてきたように思えます。

小児保健活動を考える際に、事務局の存在も忘れてはなりません。理事会で討議された事項は、事務局の二人の要職（棚原睦子、饒平名艶子）によって手際よく処理されます。中でも棚原は、昭和52年から勤めるベテランで、彼女らの采配で53市町村の乳児健診の計画と調整、医師配置、謝金の試算と支給、県や市町村との連絡や調整、各種講演会の準備や設定、文書類の作成と送付、業務計画書や報告書類の準備作成、総会・学会の準備設定、会誌の発行準備など、さまざまな業務をこなす縁の下の力持ち的存在です。

当協会のこれからの課題は、協会の趣旨に賛同し、これを継承発展させていく後継者の育成です。20年目の節目を契機に若い人達の多数の参加協力を希望する次第です。



沖縄県小児保健協会と歴代会長

沖縄県立沖縄看護学校
仲里 幸子

20年の歴史の流れのなかで沖縄県小児保健協会は、多くの人の理解と協力によって成長し

てきた。琉球政府時代の古い県庁舎内の予防課は、特に縁深いものである。発起人の稲福盛輝

先生、山本達人先生、知念正雄先生が狭い予防課の片隅のソファに腰掛けられ、宮城英雅課長に協会設立について、その必要性を説明していらっしやった。サミュエル・ウルマンの「青春」を思いおこさせる光景であった。「優れた創造力、逞しき意思、炎ゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心、安易を振り捨てる冒険心」会長を中心に理事会、委員会、事務局活動及び会員活動の中にその精神がみられ、小児保健協会も成人式を迎えることができた。これからさらに、小児保健活動の社会的使命は大きい。

小児保健協会は、すばらしい歴代会長との出会いがあった。1973年7月28日許田商会の若松ホールで設立総会と学会を開き、初代会長の重責を、仲地小児科の仲地吉雄先生が引き受けられた。理事14人、会員209人、会費500円でスタートした。事務局員は無で予防課母子衛生係が業務を担当し、本来の多忙な公務の中、さらに多忙をきわめた。夢のようである。小児慢性疾患実態調査、沖縄県と初めて乳児一般健康診査の委託契約を締結、「沖縄の小児保健」創刊号発行、沖縄県小児保健協会シンボルマーク設定等、1974年5月の総会までの約10か月間で随分走ったものである。

仲地先生は、1978年第6回総会で二度目の会長職を引き受けて下さった。職能団体（小児科医、保健婦、助産婦、看護婦）への講演会補助制度の設定、第1回母子保健指導伝達研修会の開催等、諸々の事業の芽出しをして下さった。初代・4代の仲地会長は、学究派で安易な気持ちで決して妥協はなさらなかった。理論的に、学問的に、時には厳しく現実をよくふまえた上で、将来を常に考えられ、随分教えて下さった。公務の合間の昼食時間は会長との連絡が多く、係の職員はよく緊張したものである。しかし、若い人の意見にも耳をかし、大切になさった。第29回日本小児保健学会が沖縄で開くことが出来たのは、先生の力が大きかった。1980

年9月に突然、天国へ旅立たれたが、20歳になった小児保健協会の成長を喜んでいらっしやる事と思う。偉大な会長であった。

第2代会長稲福盛輝先生は、発起人の代表格で実行力に富み、1974年5月より76年4月まで会長職を努められた。財政的に少し見通しがたったので、事務局職員が1名採用された。母子衛生係一同ホットし仲間がふえたことを喜んだ。それと同時に宮古・八重山地区の乳幼児健診が平山宗宏先生を団長としてスタートした。小児保健研究の奨励のため、設立2年目にして第1回研究奨励金が設けられたことは画期的な事であった。どれだけ多くの若い人々に希望を与えたことであろう。子育て中の親を対象に会長の執筆で沖縄タイムス（夕刊）に“赤ちゃんの健康”が32回シリーズで掲載され、さらに収録集を発行し、特に若い母親や父親に喜ばれた。

1976年4月より1978年4月までは第3代会長として佐久本政彦先生が務められた。規約により会長の任期は一年であったが、会長職の重要性和組織運営上、規約の一部改正が行われ、佐久本先生より任期が2年となった。毎年総会毎、会長職が気がかりであったのが、2年となり役員はホットした。これまで宮古と八重山地区で行われていた乳児健診が、那覇保健所管内の久米島でもおこなわれるようになった。1973年より駆け出した協会の活動の充実強化を図り定着させるために、佐久本会長は大変苦勞をなされた。

仲地吉雄先生が突然この世を去られてから次期会長への引つぎまでは副会長の原實先生が会長代行をして下さった。第27回日本小児保健学会に於いて、正式に知念正雄先生を会頭に第29回日本小児保健学会が沖縄県で開催されることに決定した。社団法人化を控え、事務局も理事会も多忙をきわめた。小堀弁護士事務所と連絡をとりながら予防課の指導により、1981

年1月に社団法人沖縄県小児保健協会設立総会が開かれ、第5代会長に知念正雄先生が選出された。会長代行の原先生の熱意により、待望の法人化をすることが出来た。

第5代会長知念正雄先生を中心に、日本小児保健学会沖縄県開催について準備がスタートした。8年余も事務局を無料で置かせて下さった予防課の協力により、旧県立公害衛生研究所に移転することが出来た。会長はじめ役員、特に事務局職員は仮住いから、借家の自分の家に住むことが出来、事務局の独立は協会の大きな発展へとつながっていった。小さな事務局に協会の看板を掲げ、学会総責任者の原先生を中心に役員は土、日返上で、夜おそくまで、情熱を燃しながら頑張った。大学以外の民間団体の会長が学会の会頭を務めるのは、日本小児保健学会の歴史始って以来、初めてのことであり、皆、使命感に燃えていた。沖縄で開催された日本小児保健学会は、これまでにない盛会をみ、学会の流れを沖縄県小児保健協会が変えた。とまでいわれ高く評価された。会員が一致団結して行動した実績は、みんなで力を合わせてやれば出来る、という自信につながり、その精神が今日の小児保健協会を支えている。といっても過言ではないと思う。学会終了と共に“沖縄県小児保健協会設立10周年”を迎えるにあたり、何をなすべきかの討議がスタートした。知念会長をトップにエネルギーにあふれた集団で、1983年琉球新報にシリーズ「子どもの健康」第1部～第3部が掲載され、沖縄タイムスに掲載した「赤ちゃんの健康」と同様に、子どもを持つ親に喜ばれた。さらに10周年記念式典の開催、会旗の制定、記念誌の発行等、多くの記

念事業が開催され、10周年の節目に立ち、新たに将来への目を向け、会員共々よき機会を持つことが出来た。1986年、琉球新報へ掲載した「子どもの健康」をもとにして、「子どもの健康」を発行した。好評で翌年増刷をしたものである。知念会長時代は、10年の大きな区切りの中で協会はさらに成長発展した。

現在の小渡会長は第6代で、1987年に知念会長より引きつぎ、20周年を迎え協会は、設立目的に沿って、さらに飛躍をする時がきた。協会が小児保健活動を行っていく上で、その拠点となるセンターづくりがある。小児保健センター建設のため、東京都や埼玉県を視察調査が行われ、現在も委員会を中心に検討中である。多くの県民に、子どもの健康を理解し関心を持ってもらうために、「明日を拓く子どもたち—その望ましい姿を求めて—」をメインテーマに子どもフォーラムを3回にわたって開いた。新報ホールは満席で多くの人々の関心をあつめ、その後、「からだど心の周辺」としてまとめて出版し、好評をえた。乳幼児健診にたずさわるチームメンバーのため、乳幼児健診保健セミナーを1990年より開催した。健診を実施するには、効果のある健診でなければならない。あわせて「乳幼児健診マニュアル」の発行もその一つである。

沖縄県小児保健協会が、一人一人の小さな力を結集して、20年間このように活動が出来たのは、すばらしいリーダー性をもった会長達にめぐり会えた事である。心から感謝をしさらに発展していくことが出来るよう、共に助け合い、励まし合い頑張りたいものである。



沖縄県小児保健協会創立20周年を祝して

沖縄県小児科医会長
知念正雄

沖縄県小児保健協会が20周年を迎えられ、誠におめでとうございます。昭和48年に設立されて以来、本県の小児保健のために重要な事業を遂行し、着実に業績をあげてこられたことは周知の事実であり、敬意を表します。とくに貴協会が創立以来とりくんでこられた乳児健康診査の事業は、私ども小児科医会員と深く関連しており、県の委託事業として各市町村と協力して円滑に推進され、20年の長期にわたって実施されて、本県乳児の健康の保持増進のために多大な成果を収めております。このことは特

筆すべきことです。他県にないシステムで、県内全市町村にわたり同一レベルの乳児健診事業がなされてきましたことは、とても重要なことです。本事業に県小児科医会の会員が、直接・間接に関わってこれましたことは、私共にとって大きな喜びであり、今後とも全面的に協力していきたいと思っております。

貴協会が、この20周年をひとつの節目として、今後ますます発展し、沖縄の小児保健のためにご活躍されることを念願してやみません。

平成5年10月吉日



乳児健診と育児と育自

たから小児科医院
高良聰子

小児保健協会創立20周年、おめでとうございます。20年という長い年月、協会を守り育てて今日の形にし下さった諸先輩方のご尽力に心より敬意を表します。

思いおこせば20年前の当時、私は県立中部病院の小児科研修医として、小児疾患の診断と治療に奮闘する毎日でした。それで健康な子どもの成長発達について考える余裕はあまりなく、医長の知念正雄先生や那覇市の仲地吉雄先生達が当協会の設立話をしていたのを対岸のこととしてきいていたように思います。しかし乳児健

診をやってはじめて、その大切さを改めて認識させられたものでした。病気の子どもの診るときは正常な子どもの成長発達を抜きにしてはできません。

設立当初の最大の活動が乳児健診で、『沖縄の乳児はすべて小児科医が健診しよう!』との目標で全県的に開始されました。私たち若手の医師は月2回程、各市町村に出かけました。病院内の子ども達と異なり比較的元気な子どもを診るのはまずほっとするものでした。そして、その地域の状態、慣習、母親たちの考え方にも

直に接することができました。また保健婦さん達との意見交換はとても勉強になりました。当時の健診ではまだ病気を発見することが主体で、先天性心疾患の子、代謝疾患のありそうな肝脾腫の子、顔貌のおかしい先天異常の子などが必ず1～2人は見つかり、体重増加不良、貧血、膿痂疹の子などはザラでした。

ミルクをのまない、おっぱいの出が悪い、夜泣き、睡眠時間などの育児相談には答えられないことも多く、保健婦さんに助け舟をだしてもらったり、帰宅してから調べなおしたりして対応したものです。母親達の素朴な疑問に対しては大学の抗議や小児科学のテキストは全く参考にならず、その後健診を数多く行うことによって考えさせられ体得したことでした。

そのうち私も母親となり、私自身の育児体験から乳児健診に役立てたり、逆に乳児健診から得た知識を子育てに応用したりで、まさに“持ちつ持たれつ”関係でした。薬の飲ませ方とか哺乳の問題、スキンケア、仕事を持った母親が楽する方法など、体験を通した具体的なことには母親達も興味をもち、かなり説得力があったように思います。

私自身が第2子を持つとまた別のサイドからアドバイスができました。兄弟であっても類似点と異なる個性があること、忙しくなるとすべて育児書通りにはいかないこと、自分のライフスタイルに合わせた形が最良であること、緊張感のあまり育児ノイローゼにならないようにゆとりを持つことなどでした。また子どもが幼児期になったり、学童の相談を受けたりすること

によって、まだまだ大人の視点でみていたことに気づき、私自身の育児観を反省させられたり見直したりでした。そんなことで、私にとって乳児健診は育児を学ぶことであり、それはとりもなおさず育自＝自分自身を育てることでした。乳児健診を通して私自身の人生観も影響を受けており、それは20年経った今でもまだ学びながら、少しずつ修正させられているのです。

乳児の状況も少しずつ変わってきました。私なりの印象としては、約5年毎に変わってきたように思われます。最初の5年間は病気の発見と治療が主体だったこと、次の5年は目ざましく発達した未熟児医療によって未熟児出身の乳児のケアが改善したこと、未熟児死亡が減少したことでした。15年目の頃は少産化傾向で母子共に過保護、過干渉となって敏感になっていること。アレルギー的疾患が増えてきていることです。そして最近の5年間は乳幼児をとりまく心因的な問題や環境の影響が増えてきていることです。

当協会の施行してきた乳児健診も転機を迎えてきたと思われまます。もちろんこれまでの全乳児を小児科医が診察することは大切ですが、他方成長の過程がたどれるようにフォローすることやこころの問題、また母親への心理的なサポートなども大切だと思われまます。

幸いにも私は、今度は協会の中で将来計画などを考える役目につきました。これまでの体験やまだまだ勉強させられている育児を通して少しでも21世紀の子どもたちの幸せにつなげる仕事ができればと思っています。



先島の乳幼児一斉健康診査

平良市保健予防課
松原正郎

昨年4月1日付けで保健予防課に転任して早1年を向かえようとしている。その間母子保健事業をはじめ保健衛生全般をみてきた。

私にとって市役所25年の勤務の中で保健衛生の仕事は特殊としかいいようがない。

これまで一般行政職ばかりできた私は宮古保健所の医師をはじめ宮古病院、宮古医師会の先生方と会議がある度なんとなく緊張してきた。それは私自身の勤務の浅さと風邪以外の病気の経験をしていないせいかも知れない。

転任してのこの1年は特に保健婦の職員のみなさんにいろいろ保健事業の内容や疾病等についておそわりながらやってきた。

さて、今年沖縄県小児保健協会が創立20周年を迎えるにあたり衷心よりお慶び申し上げます。記念事業の一環として記念誌を発行するにあたり先島健診についてなにか書けとの依頼に普段の筆不精の私にとってとんでもないものが舞い込んできたと思った。急ぎ保健婦や担当職員より資料を集め筆を持ったしだいである。沖縄県小児保健協会の創立が昭和48年その翌年昭和49年より先島における「宮古、八重山母子一斉健康診査」がはじまったと記されている。昭和49年をふり返って見ると私の子どもがつつぎと生まれた頃である。昭和46年、48年、50年に3人の子が生まれているので当然私の子どももお世話になっていたわけである。特に3番目に生まれた長男は小児喘息で病院によく通っていたことを記憶している。この「宮古、八重山母子一斉健康診査」は離島県の離島に位置する宮古、八重山は医療事情について厳

しい状況にあり地域格差をできるだけ是正するため厚生省派遣団として当時東京大学教授の平山宗宏先生を団長として「宮古、八重山母子一斉健康診査」班が組織され、沖縄県、沖縄県小児保健協会派遣医師団及びその他のスタッフで宮古八重山の子どもたちのすこやかな成長のためご尽力され今日に至っていることを資料で拝見し感謝しているしだいであります。

私にとって初めて担当する平成4年度の乳幼児一斉健康診査はご承知のとおり7月21日より7月25日まで実施されました。この実施に向けて宮古保健所をはじめ各市町村の担当職員で構成する宮古地区公衆衛生連絡協議会では実施準備について協議し事務局をあずかる伊良部町を最終日程とし公表、懇親会の準備を進めてまいりました。本市においては以前より経験のある担当職員や保健婦を中心に母子保健推進員も動員し準備実施に万全を期すべく一週間程の作業が行われております。

7月20日東京大学教授の日暮眞先生を団長一行医師4人、臨床心理士3人の出迎えに空港へ赴く。沖縄県環境保健部予防課長の恩河先生をはじめ主幹、係長、宮古保健所長、並びに保健婦のみなさん、各市町村の担当及び保健婦で出迎える。空港での県予防課長のお話を聞くと19回を迎える歴史ある乳幼児一斉健康診査も離島の医療機関の整備に伴い検討の時期に来ているという。午後よりオリエンテーションが行われ緊張の中にも以前より顔見知りの先生や担当職員のごやかな雰囲気になんとか心が落ち着く。宮古の医療機関は数10年前にくらべ

ると確かに整備は進んでいる。県立宮古病院の整備拡充、開業医院も増設され宮古保健所、宮古病院、宮古医師会と宮古の疾病について組織的に研究を始めている。しかし乳幼児の一斉健康診査を行なう組織の統一はなされていない。一般健康診査、特殊診査をふくめた内科、神経科、皮膚科、眼科、耳鼻咽喉科、外科、整形外科、泌尿科、整形、尿検査、その他と一斉に健康診査を受ける機会はこのとき以外はないと思います。専門医の先生方はただ健康診査のみを終えて帰るわけではなく持ち帰りこの地域の生活環境まで研究し、原因究明まで行なうこの健康

診査は地元担当職員として将来国のために成長していく子ども達が健康ですこやかに育つことを願わずにはいられない。平良市においての今回の受診率は全体で84.1パーセントであった。私達担当職員はこの乳幼児一斉健診の受診率を上げるため啓蒙活動をしなくてはならない。今後共、本事業の継続と離島における小児保健のご教示を賜り健康診査を通して宮古の小児の健康増進に寄与していただきたい。

最後に先生方のますますのご活躍と沖縄県小児保健協会の発展を祈念します。



にんじんの島

石川保健所勝連駐在
蔵根瑞枝

3月、暖かい日ざしの中、緑の畑が陽気な朱色に染まっていく。津堅島は、今年も人参の季節を迎えた。5月までの約3か月間、島中の人々が人参を掘り、いくつかの集荷場では、出荷の作業にあけくれる。洗う機械の音、選別や袋詰め作業に集う人々の笑顔、『はいヨ！はいヨ！』のかけ声で、袋詰めや箱詰めの人参が次々と船に積み込まれていく。中学生にもなると、あちらこちらで袋詰め作業のアルバイトをする。島中活気にあふれる時である。

この、のどかな島を担当して5年が過ぎようとしている。ここで様々な感動に出会った。島唯一の診療所に勤める地元の看護婦さんの情熱が、子どもたちをボランティアに目覚めさせているのである。2年程前、地域で寝たきりのお年寄りに対する訪問支援を強化する目的で、診療所の看護婦さんへ、訪問指導を依頼すること

になった。その頃、島の中学生在が活力なく、このままでは将来の夢もしぼんでしまうのではないかと案じていた看護婦さんから、『子ども達に私の訪問しているお年寄りの話をしたら、一緒に家をまわってみたいと言っている』という話があった。さっそく、子ども達一緒に家庭訪問がはじまった。まず、お年寄りが喜んだ。『あの〇〇の孫ねえ。ハァーこんなに大きくなって。またおいでよ』と。そして、子ども達が『楽しい！』と言ってきた。それなら日を決めて自分達だけで会いに行こう。2人か3人ずつのグループで行くと、会話もはずむ。おしゃべりだけじゃなくて、何かをやってあげたい。でも何をしたらいい？それなら、お年寄りのことについて勉強してみよう。日頃、ボランティア育成に携わっている町社協が、子ども達を応援してきた。さらに輪が広がって、『自分達のやっ

ていることって何だろう?』と考えはじめた。もっとたくさんのお年寄りのいる老人ホームはどこなところ?行ってみたい。そして、老人ホーム訪問も、年に一回の恒例になりつつある。あれから、3代目のメンバーが、この春卒業する。とても小さいけれど、確実にその輪が広がっている。お姉さん達がやっているボランティアって何だろう。ちょっとのぞいてみよう、ついてくる弟や妹。昨年の夏、中学生の弁論大会で、『島に橋がかかるのはイヤ。島が汚れてしまうから。いろいろな勉強をして、いつか島の役に立つ人間になって戻ってきます』と言っていた子。自分自身を見つめながら、周囲の人や環境をも見つめなおしているようだ。

ここ数年、島の人口は減り続けているが、2年ぶりの赤ちゃんが昨年、ひとり誕生した。この子の、瞳の輝きを、みんなで守り続けたいと願う。離島ゆえの苦しみ、貧困、苛立ちは、現在も変わらないだろうが、少しのきっかけで、

子ども達は次々に新しいものを発見し、感動し、それを糧にして成長していく。微妙な思春期の葛藤は計り知れないが、その側面に触れながら、応援することはできるのではないだろうか。ともすれば、子ども達の爆発的なエネルギーに圧倒されるが、それはそれで、素直に驚けばいいと思う。人間の弱い面や、強い面、すべてを知らせながら、私達自身が夢を持ち続けていくことが大切だと思う。

老人問題が大きく取り上げられてきている今日、今一度、いずれ老人の面倒をみなければならぬ子ども達への思いを、熱くしなければならぬと、自分に言いかけせながら、日々の保健活動をすすめてきた。ボランティアは、行政はもちろん、周囲の大人達の小さな支えが集まれば、炎となって燃え続けることだろう。自分達が、人を笑顔にさせることができるという充実感を、皆で一緒に味わうために。



乳幼児健診に参加して

臨床検査技師
大城 真佐子

沖縄県小児保健協会の創立20周年と、宮古・八重山地区一斉健診が、20年目を迎えられる事を心からお喜び申し上げます。

私も、宮古・八重山地区一斉健診に、55年から参加させていただくようになって10余年の歳月が立ちました。

参加当初の頃は、受診者の数は多く、健診会場は今ほどりっぱな建物でなく、まず健診場所へ着くと、机、椅子等を並べたりして、会場作りから始めた所もありました。

今では、どこの健診会場もりっぱな建物に変わり、クーラー設備のされている所もあって、7月の猛暑の中でも、楽しく健診をやらせて頂きました。

最近では、乳幼児の数は減り、検査(貧血、尿検査)も定期的に保健所の方で、やられている所もあって、充実してきたように思いました。

健診の形式も、一般健診から心理・療育・発達を中心とした健診へと、以前と少し変わってきたように見受けられました。

検査の方は、乳幼児の数が減り、仕事量は減って楽になったのですが、検査のスタッフが4名から2名に減った為、今日は与那国、明日は波照間、小浜と移動が多く、大変な時もありましたが、地元の人達との交流、毎晩のように健診スタッフとお酒や御馳走を前にしての楽しい一時で、その時の大変さは忘れてしまいます。

最近、本島の乳幼児健診に参加して、宮古・八重山地区の乳幼児の方が、本島よりも、心理・遺伝相談等も加わったより専門医に、健診してもらっているように思いました。

保健婦さん達も、それぞれの専門の先生方に相談したり、色々とお話している様子を見えますと、保健婦さん達も幸せだなあと、遠くから見て感じました。

宮古・八重山へ伺うたびに、いつも地元の暖かい歓迎には、大変うれしく思いました。

今、ペンを取りながら、少しでも健診のお役にたてたのかなあと反省しております。

終りに、健診に、たずさわってこられた団長を初めとする諸先生方、関係者の皆様へ、心から感謝と御礼を申し上げます。



母子保健推進員になって

読谷村母子保健推進員
桑江千恵子

私達の読谷村は人口32,000人余りで、世帯数にして約8,600余世帯と県内で豊見城村に次ぐ人口の多い村でございます。

私の担当する地域は約390戸程ですが、年々子どもの出生数も減少しつつありまして、現在では毎月の訪問件数が15~20件で多い月に25~30件程度あります。

読谷村では昭和53年度に、村民を対象とした成人病予防のために健康体操の普及事業が取り入れられ、当時字の婦人会役員であった私は、地域の健康づくりに少しでもお役に立てばと参加致して居りました。それがきっかけで、村に当時は母子保健推進員が位置づけられてないため役場の担当や駐在保健婦の呼びかけで、結成準備のための学習会という目的で保健協力員として5人のメンバーが依頼を受け、保健婦からの指導を得ながら住民検診や乳児健診等の協力を致しました。

その後昭和55年読谷村母子保健推進員会が結成され、村長より依頼を受けて現在の推進員活動が始まりました。

読谷村の活動内容も他の市町村と同じだと思いますが、母子係から送られて来る健診通知の訪問配布や、未受診児への再度通知、家庭調査を兼ねた母親への推進活動等、母子保健を理解してもらうためのコミュニケーションを図りながら現在23人の推進員が活動をしています。

また健診当日の身体計測等、当番制で協力しているほか、妊婦への健康な赤ちゃんを生み育てるためのうぶ声教室への呼びかけ、離乳食実習への協力、特に離乳食実習の際の実習をするお母さん方に代り赤ちゃんのお守りはほんとうにぎやかな時間です。

母子保健推進員の学習を兼ねての毎月の定例会に全員が都合のつく限り参加し、楽しい雰囲気の中で活動内容を相談し合いながら助言を受けて

います。また、毎年村で実施している健康づくり村民のつどいでは、赤ちゃんだっこコーナーを設け、赤ちゃんに接する機会の少ない子ども達に赤ちゃん人形で抱き方やねかせ方、おむつのあて方、そして生命の尊さ等を伝えて大変好評でございました。このように地域の皆さんにとけこんで推進活動のPRをしようと、保健婦や母子係と共に意欲的に頑張っております。その他、日帰り研修を兼ねての他市町村の母子保健推進員さんとの交流会も楽しみの一つでございます。

活動は決して楽しい事ばかりでなく、結成当初、担当区出身である私でさえ、今は他市町村から嫁いできた若いお母さんが大部分ですので顔身知りがなく母子保健推進員とは何者だと思われ、生命保険のセールスマンと間違われて活動内容を説明するため苦労した経験もあります。

現在ではお母さん達にも母子保健推進員を理解され訪問先でもご苦労さまと労をねぎらう声も聞けるようになりました。

また、日曜日に実施される乳児一般健診等には父親同伴も多く見受けられるようになり私達の年代の育児時代に比べて父親の育児参加が目立ちほほえましい光景も見られるようになりました。読谷村でも他の市町村の例にもれず年々都会化の波が広がり大きなアパートがふえて入居者の多くが子どもを保育所にあずけての共働きのご夫婦が多く訪問するたびに不在で、同じ家庭に何度か足を運ぶ事もあり初めは「またも留守か」とタイミングの悪さに一人ごとをつぶやく事もありましたが、今では物は考えようで、腰にさげた万歩計の数字が増えて歩け歩け運動も役立っていると自分を励ますようになりました。

うぶ声教室への呼びかけのため訪問して直接お会いして様子を見ようと思っても妊婦さんのほとんどがお勤めのためか留守がちで本人に会う事が出来ず家族に預けて帰る事も多く電話で

は詳しく説明する事も出来ず気になる事もございます。

10年余りの活動の中では直接母子保健に関する事以外の問題にあう事も少なくありません。もう今回の任期で引退しようかと考えた時期もありますが、乳児期から健診にたずさわっているお子さん達が成長し、1歳半、3歳児健診等への訪問活動を通してつながりの出来た子ども達のすくすくと大きく育った元気な笑顔を見る時の喜びはまた母子保健推進員でなければ味わう事の出来ないものも在ります。

母子保健推進員の役割は深くほり下げれば活動にもきりがなく、福祉との一線もどこで引いて良いか考える時もあります。そのような問題にはまず民生員との連携をとりながら出来る限りは相談にのって上げます。時には登校拒否になりそうな児童をもつ母親の悩みの相談相手になったりまた、少し精神発達の遅れのあるお子さんを持つ母親からその子の将来についての悩みを相談されたり、そんな時出来るだけの事はやって上げ、自分で相談に応じ得ない時にはその面に詳しい方へと引き継ぎながらアドバイスをして上げるように努めています。

母子保健推進員は決して目立たない地味なボランティアですが、あせらずそして何事にも知ったかぶりをせず指導に迷う時には先ずは自分も指導を仰ぎながらやって居ます。

訪問先から知り得た家庭的なプライバシーは他人に口外する事なく地域住民のよき理解者でありたいと願い時間のゆるす限りあらゆる研修会に参加しなければと考えております。

またこれから必ず来るであろう高齢化社会に向けて、次の世代を背負って立つ子どもを生み育てる母性が健康で幸せであるようにと願うと共に無限の可能性を秘めた子ども達がどんな環境で生まれても平等で健全に育つ事を心から願い、そしてその子ども達の健康づくりのお手伝いをする事に私達母子保健推進員は誇りと勇気

をもって当たり地域の健康づくりに行政や保健
婦さんへのパイプ役として頑張っていきたいと

思います。



母子保健推進員活動をとおして

浦添市母子保健推進員
金城愛子

私は浦添市の母子保健推進員になって8年目になりますが、これまでの訪問活動をとおしてたくさんの母子とかかわりをもってきました。その中でも特に印象深かった2つの事例を紹介します。1つめは1歳半健診の勧めに伺った2児の母親ですが、コンピューター関係の会社に勤めており、ご主人は単身赴任で家にも週に1回しか帰らず、育児と仕事の両立に頭がパニック状態で夜も眠れずに困っていると言葉少なく話してくれました。そこで私は即その地区の担当の保健婦につなぎ、その後は近くを通るときは声かけをして会話をするようにつとめました。最近では引越していませんが、気になる今日この頃です。2つめは地域の婦人会から、最近変な中学生が空き地や公園をうろうろしている、娘をもつ親はこわいという話を耳にしていた矢先、3歳児健診の未受診訪問カードがきた私は受診を勧めながらその家庭を訪問したところ、その変な中学生というのはその3歳児のお兄ちゃん、母親いわく、家族構成は父母、1男3女の6人家族で中学生の長男・長女は養護学校に、次女は普通の小学校に通っている、父親は仕事で、タクシー代をだしてまで健診にはいかないということでした。そこで私はその母子を健診会場へ送り、受診した結果その子は言葉の遅れがあり、継続支援が必要ということでした。さらにこの子の家族についてはこの健診の受診をとお

して保健婦さんにつなぎ、家族計画の指導やお兄ちゃんについては生活指導をすすめてもらったところ、不審な行動もなくなりました。

これらのことから、私たち母子保健推進員は保健婦との連携も大変大事なものと感じ、母子保健の役割と必要性を痛感しました。また、地域での母子保健活動をとおし、いろいろな人に接していく中から自分達も学ぶ事が多く、さらに人のために何か役立ったという満足感を味わいながら、母子保健推進員としての自分自身の生活も充実しています。さらに、母子保健推進員として、ますます充実させていくために、浦添市では母子保健推進員連絡会が、他市町村との交流会での刺激を受けて平成2年より発足しました。会則や組織づくりをはじめ、より積極的な活動を続けて今年で4年目を迎えます。この連絡会の発足によって行政からの連絡がとりやすくなり、ぬきさしできぬかわりができるようになりました。また、主な活動は母子保健事業への参加や毎月の定例会での勉強会、担当職員や保健婦との宿泊研修会や、また最近では県外への先進地研修にも参加しました。そしてそこで学んだことを早速持ち帰り、浦添市では母子の一番の問題は何か、私たちにできることは何か考えました。そこで手初めにむし歯の罹患率をとらえ、平成3年度より毎年、市の健康福祉まつりでむし歯予防のおやつコーナーを母

子保健推進員自らの力で設け、結果は大盛況に終わりました。そしてそれは母子保健推進員としての自信にもつながりました。

その他に布の絵本などの手作りおもちゃづくりや、2歳児のはみがき指導でのおやつづくり等とグループごとの自主活動も楽しい雰囲気であります。今年度の自主活動は「ちぎり絵」の勉強会が予定されております。

最後になりますが、私が新潟県の研修会に参加して感じたことですが新潟県のように、わが県においても、母子保健推進員の全県的な協議会があれば県内の推進員同士の交流も活発に行われ、また推進員の資質の向上や結果的には活動の活性化にもつながるのではと思います、県母子保健推進員協議会の実現を期待しています。



母子保健推進員活動をとおして

宜野湾市母子保健推進員
平安名 典子

宜野湾市の母子保健推進員は、発足して18年目を迎え、各行政区に1名ずつ配置されており23名が地域で活動しています。乳児一般健康診査、1歳6か月児健康診査、3歳児健康診査をはじめ、母親学級や予防接種等のお手伝いをしています。

月に一度の定例会に、講師を招いての勉強会や互いに情報交換をしながら、母子保健推進員活動を行っています。勉強会は、母子保健推進員としての知識を深めるだけでなく、自分の健康の保持及び増進に役立つ事も多く有意義に行っています。

私たち母子保健推進員の仕事に、健診未受診者名簿から、自分の地域の対象者を抜き出して訪問したり、妊婦に母親学級の受講案内等の訪問活動があります。未受診者には、通知した日に来れなかった理由をおりこんだアンケートをとり、次回の健診日を知らせ受診を勧めます。母親学級は丈夫な赤ちゃんが生まれることを願って行われ、主に初産の方に受講を勧めます。その他にも、小児がんの一種である神経芽細胞腫

を早期発見するために行う検査を勧める訪問があります。検査セットは、乳児一般健診時に配布されますので、私たちは提出もれないように、赤ちゃんが6か月になったら訪問し確認をします。

訪問の時、何度足を運んでも会えない場合もあり、その時は不在メモを利用しています。最近では共働きの世帯が多くなり、訪問するのも楽ではありません。所在地がわからない場合には、地域の公民館を活用していますが、そこで家庭の状況等も知ることができ大いに役立っています。

乳児一般健診は年に6回、市役所大ホールにおいて日曜日を利用し行われます。行政の方が受付や各エリアへの案内を行い、医師や看護婦をはじめ、検査技師、保健婦、栄養士の方々が、それぞれの専門分野を担当し、私たち母子保健推進員は8名動員され、主に身体測定を担当します。3～4か月児の測定はスムーズにいくのですが、9～11か月児は、人身知りして泣きだす子が多いので親と協力して測ります。たいて

いの子が身長測定の時、ねかせて測るのをいやがるようです。幼い子に、測定の意義を理解できるはずがなく、「はちまきはちまき、ヨーイドン、おぼうしおぼうし、いくつかな」などと、自分で勝手に作って歌い、ただただあやして測るだけ…。とてもにぎやかな測定風景です。

測定の際には、テーブルの上に身長計をセットしてあるので、子どもを落下させないように体全体でガードし細心の注意を払います。また、対応のまずさ、あるいはこちらの不用意な一言で、不愉快な思いをさせないように、言葉を選びながら身体測定の流れを説明するように心がけています。朝8時半から待機し昼食をはさんでかたづけが終わる午後4時頃まで、声もガラガラになり疲労もなかなかのものですが、市民の健康を守るための手伝いが出来ることを誇りに思います。

母子保健推進員になって2年足らずの私が、3歳児健診受診の勧めに訪問した時の事です。5歳位の男の子が、布団の上にポツンと座っていました。声をかけましたがうつろなようすで返事がありません。おじいさんの話しによると、2～3日前から目が充血していたので、病院で診察を受けて帰ったばかりとの事でした。下の子の健診の勧めに来た旨を告げると、その意義を理解してくださり、「ぜひ受けさせないとい

けない」という返事に、私は心の中で「よかった」と思いました。健診の日程を伝えて帰ろうとすると、おじいさんが、「この子たちは親の事を全然口にしないのですよ」と、少し寂しそうに話しました。両親が離婚していて、父親は本土へ出稼ぎに、母親は買い物に行ってくると、子どもたちを預けたまま行先がわからなくなっていると言うのです。両親の離婚で犠牲になるのは、やはり子どもたち。夫婦に何があったのか知るよしもありませんが…。ポツンと座っていた子の瞳が心に残り、胸が痛みました。幼い兄弟の行く末を案じつつも、微力な私には、やがては帰ってくるであろう父親と共に暮らし、健やかに成長する事を祈ることしかできません。

私たち母子保健推進員は、質問された事について、答えられる範囲内できちんと対応しています。また、専門的な事がらは、保健婦さんや、行政の方に引き継いだり、確認して返事をするよう常に心がけています。健診の意義を、押しつけではなく正しく伝えられるように、これからも自己啓発に努め、責務を果たしていきたいと思しますので、皆様のご指導をよろしくお願い致します。

さらに、沖縄県小児保健協会が、ますます発展され、未来を担う子どもたちの健康づくりに貢献されますことを、お祈り申し上げます。